

---

# 狂イ始メタ歯車。

ひとこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂イ始メタ歯車。

### 【ZPDF】

Z00321

### 【作者名】

ひとい

### 【あらすじ】

誰かが壊した壊された。触れなくて良い歯車に誰かが触れた。力  
タンと音を立てて一瞬時が止まった。狂イ始メタ歯車。

## 登場人物／設定（前書き）

あらゆるところにひぐらしの影響があります。

それを任意で読んで下さい。

殺人などもやっています。

田和キャラはそんなことしない！

と「う方はお戻りください。  
どうぞスルーしてください。

（これは設定ですので本文とは違います）

## 登場人物／設定

### 登場人物・設定

小野 妹子 13

パニック障害、解離性遁走。

親から虐待。小学校には行つていない。  
太子達と離れると少しパニックを起こす。  
かなりの演技派。嘘が得意。

聖徳 太子 15

特に障害はないが、強いて言つならホコリアレルギー。

大金持ちの息子（性格は原作と同じです）。

親が閻魔や妹子のことを屈辱するので、殺した。

縁既 閻魔 14

二重人格。

太子達のことぐらいしか信じていない。  
いじめ、虐待経験者。

鬼男君LOVE。

天河 鬼男 13

鬱、PTSD（外傷後ストレス障害）など。

過去に親、親類全般を目の前で殺され、PTSDに。

## 薬物依存症、不眠症。

親が薬物を吸つて いるのを見ていたら、自分も吸わされた。  
それから、薬物依存症に。  
現在治療中。

太子の親の権力が残っている電気会社で、携帯を使っている。お金も住む場所も、すべて太子の親の物。

## 登場人物／設定（後書き）

ビュースリ（略してます）の五話完成してないんで、ヒマ潰し、気分転換に書きに来ると思います。  
なので更新遅くなります。

もしかしたら二三ヶ月書いて書いていくかもしません。

## 一話 クギワシタモツ（繪書モ）

警告は設[定]の前書きをでやつしてます。  
アホ作者のくんな文です。  
期待しないでください。

ひぐりしの影響があつたつします。

## 一話 クギラレタモリ

まるで夢のよう  
くるくる回つて  
粉々になつた。

どんなに丈夫な物でも  
バラバラにしちゃえばただの破片。

人間もね。

「妹子ー！つてあれ、無視かな？」

「そりじゃ ありません。太子には聞こえない声で返事をしました。」

妹子が馬鹿にしたような目で見る。

何?今笑つたよ(目で)!何でこの状況で!

「たあ――――いい――しげホツ・・・むせた。」

私は驚いて妹子に飛びつく。

「ギャアッ！出た！妹子！」

「」んな唇間からでるかー」のアホ太郎！」

そう妹子が言つた瞬間、間延びした連絡音が鳴つた。

『 急遽、会議が行われる事になりました。担任に従い、早く帰りま  
しょう。・・・』

「おっけーい！着替えなくとも良くない？ね。荷物とか、どっかにおいときやいいじゃん。」

「それもそうだね！おーい妹ちゃん！鬼男君！曾良！森行くよー！今からー。」

私達がちらりと振り向いたら、曾良は無視、妹子と鬼男は呆れ顔だつた。

私達が来ると、森は歓迎するかのよつて音のない風をふかせる。

「あーまだあるー..良かつた！」

閻魔が大木のくぼみに腰を下ろす。

妹子や鬼男はまるで子供みたいに上へと登り始めた。

「僕らが小さい頃よく登ったよね。」

「久しぶりに登ったよ。曾良は来ないのかー？」

「私が行くぞー！」

私も急いで登つた。

この木は上のほうも太い。

しかも、昔廳つた足場が残つていて、早々と登れる。

「あ、学校が見える。」

「なのに音しないな。」

車の音とか、騒いだ声とか、聞こえそうだな。  
だけど、森は区切られていくかのようにな風の音しかしない。

「何か、怖いなあ。」

もうすぐ10時になる。  
何時間遊んでいたんだろうか。

「あれ、あれ、太子?..?」ですか?」

「え?」

いきなり妹子が辺りを見わたしはじめた。

「声、声も聞こえないよ、誰でもいいから、何かしゃべつて、よ。」

「妹子?..?」

鬼男があわてて妹子を揺さぶる。

「だれ、え、誰なの?太子?..?鬼男?」

「妹子?..?」

閻魔と曾良が騒ぎに気がついてあがつてきた。

「どーしたの？太・・・あ、妹ちゃんか、そつか。」

「どひじよう、どひじよう、怖いよ、暗い所は嫌い、嫌だ嫌だ！」

妹子はそう呟くとそのままへぼつてしまつた。

「妹子さんを連れて帰つて、寝かせてあげましよう。」

「や、そつだね、うん。」

私はやつと思い出した。

妹子のパニック障害。

だから閻魔はあんなに冷静で、ああそつか。  
分かつてしまつと簡単だね、うん。

「なあ、妹子はどうしたんだよ、曾良？」

「妹子さんは、精神病の一一種ですかね、パニック障害って知つてます？」

「え、うん。大体は。」

「それですね。鬼男さんとはちよつと違つ病です。」

鬼男はそれから家に帰るまで喋らなかつた。  
私は閻魔と騒ぎながら帰つてたけど。



## 一話 クギラレタモリ（後書き）

長かつたり短かつたりします。  
更新ペースは遅いですね。ハイ。  
文書くのが遅いんです。

## 11話 イソハンニア（前編）

意味分からんと思ひます。

作者の都合に合わせてるんでw

ギャグとシリアスの妙な混ぜ合わせです。

「起きる~妹子! 起きる~!!」

「そんなことしたらうなされます。」

「何だと！ ガーン」

「ガーンは付けない方がいいです。」

「ダメ出しすな！」

鬼男は帰つてからはずつと何か考えていた。  
何となく分かるけどね！

「そんなダメ出しせんでも・・・ねえ？閻魔？」

「ひい、ふう、みい、・・・俺達が殺した親つてさ、4?」

— そうですね。僕の所は死んでませんから。 —

お~お~  
なんてそんな!」と驚いてゐんだ

閨房！今は娘の無事を考えてよ

閻魔は困つたように笑つた。

「だつて、明日釈放されるんだよ、曾良の親。」

「閻魔、見て、あの家。」

私達が小5の時、魔界に出来つた。  
なんで今は中3視点で話してゐのかは察してねー。

「うわあ、最悪。」

窓から見えたのは、女と男。  
袋もつて、ダークとじりやつてや。  
薬だよね。

「 壁間にからぬべやぬよー。」

「 カハニニジヤん。帰るわ。」

「 え、ちよつと待つて、子供一ぬよー。」

「ええ~?」

アの隙間にひりひりと見えたのは、回遊するア。

「あ、戻つこた。」

「あひ~。」

男女がその子に気づく。

その子はびっくりして暴れてたけど、殴られたりして、大人しくなつた。

声は聞こえないけど、薬を無理やり吸わされてた。

「私達らしくないけど、通報してみる？」

「……うん。その男女も分からぬんだろうからね、子供の事。」

「今日の私達は私達らしくないなあ。」

「そうだねえ。」

警察が来る前に、その子連れて家に帰つた。

通報されるべきは私達なんだよね。

誘拐だよね、これ。

でも気絶してたし、全然知らない所で育てられるのも可哀想だし。

「誰ですか、貴方達は。」

「あ、起きたあ！闇魔ー！」

見知らぬ小6が目の前にいたらびっくりするよね。

「それで……ん。それがさあ、捕まつたんだよね、警察だ。」

「うー……ん。それがさあ、捕まつたんだよね、警察だ。」

その子が目を見開く。

でもちょっと嬉しそうな気がする。

「そうですか。それと貴方達の関係は？」

「通報したのが私達なんだよね。」

「・・・見たんですか。」

「・・・薬？」

その子が小さく頷いた。

すると、閻魔が歩いてきてその子の横に座った。

「吸わされてたの？」

「・・・。」

その後、閻魔がその子を質問攻めにして、3分ほどたつた後、ようやく口を開いた。

「僕が初めて吸わされたのが今年の夏です。」

「へえ・・・。」

「変な気分でした。気づいたら朝で、追い出されるように学校に行きました。」

嫌だった。

だけど、吸わないと落ち着かない。  
自分で吸うのは嫌だった。

薬を吸つている親達を見ていたら、勝手に吸わされた。

「いつあれば全部親の責任になる。」

「簡単に言ひます。」

「変な依存症のなり方。」

「わつこう病氣なんですか。」

「そつそつ、と閻魔が答えた。

「少し尋ねますが、僕を此処に連れてきたのは、何ですか。」

私が答えるが迷つてゐる、閻魔が答えた。

「可哀想だから。君がね。 . . . 僕も可哀想なんだよ。だから此処にいるんだ。」

「 . . . . 」

「閻魔 . . . . 」

「ねえ、此処に住まない? どうせはヒマだしよ、君。」

閻魔がクスクスと笑つた。  
怖いなあ。

「 . . . まあ、いいでしょ。変質者かと思いましたが。」

「酷い。」

そうして、この家、私の別荘……なんだけど、住む事になった。  
例の親たちは8～9年の懲役だと、噂が流れていた。

「曾良の親は、金払つて……釈放されるらしい。」

「金はだつやつて手に入れたんですか？僕の家はそんなに金持ちじゃありませんでしたが。」

「もう3年ぐらいたつてるもんね。捕まつてから。」

「薬の出所の奴が払つてやつたんじゃないのか？」

聞き込んで見たら、鬼男の言つてた事が当たつた。  
そこで、私はこんなことを考えた。

「そいつが、全員殺つちやおつよ。」

みんな賛成。  
決定だね。

## 1話 イソンショウ（後書き）

妹子は次話ぐらいで起こしますw  
次は殺人系になるかもしません。  
親とか詳しい過去は後々出てきます。

## 三階 キョウキトアソビ（前書き）

妹子起<sup>レ</sup>しました。

てか五か月ぐらいまえの話で、しかも一ヶ月ぐらい前書いた続きを  
かけ、つてなつても困るばかりでした  
今恥ずかしくて一話が見れませんww

「え、太子妹ちゃん担いでいくの？」

「うん・・・パニックだしさ・・・起きた時私たちがいた方がいいでしょ？」

「あーうん・・・そーだよねえ。」

まだ一向に起きる様子のない妹子を担いで、家を飛び出した。外は少し暗いけど、鬼男は起きてたし、曾良は起きていたどこか寝てなかつたらしい。

もうすぐ朝になる、すぐに済ませないと。

私たちは閻魔がどこからか手に入ってきた情報を頼りに、目的地まで走った。

「ね、ねえ釈放される時間ていつ？そこまでは分かんない？」

「ちよつと待つて、教えてもらつたハズだよ・・・」

「あ・・・あれじゃないですか。僕の親。」

「え、こんな堂々と出てきていいもんなの？」

歩きながら隣の男と楽しそうに話している。

「僕の旦は嘘をつけません。あいつらで間違いないです。」

閻魔は楽しそうに小刀のナイフを取り出す。

それが合図とでもいうように鬼男もガムテとロープをだした。

「太子は妹ちゃんと待つててねえ。すぐ終わるよ。」

「僕が・・・殴られてきてあげましょつか。油断するでしょ?」

「曾良がいいんなら。」

曾良は小走りに親のもとに行つた。

しばらく会話した後、男は曾良の腕を乱暴につかむと、地面にたたきつけた。

よつぽど挑発的なことでも言つたんだろう。

閻魔と鬼男が曾良のところへ走つていく。

あつという間だつた。

二人を人気のない場所まで誘導して、閻魔が切りかかる。  
確実に急所を狙つて、声なんてあげる間を『えず』に。

「死ねつー早く死ねえつーー！」

曾良が叫んだ。

そんなにひどいことされてたのかな。

その時、後ろから声が。

「た、太子?え?」

「お、妹子、起きた?」

「閻魔さんたちは・・・どーじ~。」

「大丈夫、朝飯買いに来ただけだから家にいるよ。」

私は閻魔に「私より先に帰つて着替える。」とメールを送り、朝飯を買つてから帰つた。

「あ、妹ちゃん起きたみたい・・・。」

「曾良、髪の毛落とさなかつたか？凶器は持つて帰つて捨てりよ。」

「大丈夫ですよ・・・」いつらの親はとつぶて死んでるし、氣づく人はそうさういないですよ。」

「じゃあ、池にでも捨てるか。これ。」

閻魔が死体を指さしながら笑つた。

「それが一番ですね。イカにしちゃあいい考え方だな。」

「イカと・・・！鬼男君ヒドウイ・・・」

死体を始末して、一足先に家に帰つた。  
後は妹ちゃんが勘づかなければいい話だ。

「おー帰つたぞ閻魔ー。」

「妹ちゃん」と太子お帰りーー！ああー！朝飯だー早く食べよー。」

「やうですね。もう朝じゃないですけどね。」

「あのー僕、いつから寝てました？」

「一日くらこじやない？俺の記憶によるとー。」

変に自信のある閻魔の言ひ方に、妹子は思わず笑みがこぼれた。  
閻魔も笑った。

人を殺した時の冷たい笑いとは裏腹に、明るい笑顔だった。  
だれも閻魔の狂気になど気づきもしなかつた。

・・・いや、気づきたくなかったのだ。

## II話 キョウキトアソヒ（後書き）

曾良君キャラ崩壊 www

いやあやっぱ小説は書きやすいかも。

## 四話 イツワコノヒリ（前書き）

今回は短め。

閻魔さん発狂タイム。

苦手な方はバックプリーズ！

「閻魔あ 今日がつこビーすんのお？」

「……………」

妹子達を無理やり学校に追いやつて、閻魔と家に残つた。

鬼男と妹子に生徒会の仕事をすべて任せるのは、可哀想かなど思つたけれど、今閻魔の元を離れると・・・嫌な思いが脳裏をよぎる。

「太子……これを……」

私が家に持つて帰つてきた分の仕事をやつていみると、閻魔は素直に手伝ってくれた。

魔がわざした資料を受け取るに手を出した

と云ふが、私は間違えて鉄を握っていたほどの手を出してしまったんだ。

閻魔の指の先が赤く染まっていく。

「うああああああっ！！痛い、痛いよおおおっ！！助けてええっ！」

!

「あ・・・あ・・・うああひ!...と、父さん、父さん助けて!...」

「え？」

「やだやだやだやだ……金なんて持っていないよおおつーあ・・・・・ひ・・・・引き出しの中ーもうやだそれあげるからびつかいつてよおー。」

「うあくまつて叫びつづける閻魔に私はどうかのじもできなー・・・・・。

何をすればいいか分からなー。」

「閻魔・・・・閻魔・・・・」めんね・・・・?」

私はふりふりと閻魔の元に寄り、庇つよひに抱きしめた。

「『めん・・・・!大丈夫だよ・・・なにもしないから・・・・閻魔を傷つける奴なんていないよ・・・・』

「「ひひうう・・・・やだよお・・・・父さん・・・・」

「父さんが助けてやるよ、お前を守つてやるから・・・・」

「・・・・・・父さん?・・・・父さん・・・・」

私が意図的に言つたんじゃない・・・・勝手に言葉が出てきた。

・・・・・・閻魔の父は優しかつたんだと、鬼男がいつか言つてた  
気がする。

そんなことが起つてから、数日たつたある日、ある噂が私の耳に入つた。

「私の叔父が・・・この町に・・・？」

それがやがて、大惨事を引き起すことにならつとは誰も知らなかつた。

## 四話 イツワコノHII（後書き）

さあ・・・」の後は惨劇が惨劇を招く最悪なものになってしまいます・・・。

不幸な連鎖。

この連鎖の発端は太子の叔父が帰ってきたからです。  
その連鎖に、連鎖を重ねたのはだれか・・・?  
これが今後の話のメインです。

## 五話 クルイハジメタハグルマ（前書き）

ついにメインに近づいてきました・・・  
そしてついにオリキヤラ登場！  
苦手な方はバックプリーズ！

## 五話 クルイハジメタハグルマ

(叔父は何の為に帰つてきた?)

学校の帰りに耳にした・・・聖徳の兄が帰つてきた・・・という噂。

(叔父が私を・・・・・!?)・・・いや、まさか。)

そもそも叔父が本当に帰つてきているかどうかも分からぬのに。

「あ、太子さん、何かあなたの叔父と名乗る人がさつき訪ねてきましたよ?」

「え・・・本当?」

帰つてからすぐに尋ねられた。

全身を虫が這うような感じがする。

まさか

まさか本当に・・・?

「お・・・鬼男、今度その人が来たら・・・私は・・・殺される・・

・

「えつ？・・・何ですか！？人当たりのよさそうな方でしたよ？」

「駄目だ、奴は・・・私の親を殺した奴を・・・探しに来てるから・・・でかそれが私なんだけど・・・」

（叔父を跡形もなく殺すなんて無理だ・・・例え出来ても、今度は叔母が・・・いやもしかしたらもつと大人数で来るかも・・・あいつは妹子や鬼男を人質にしてでも、私を探しに来る！－）

それから私は学校へ行かなくなつた。

食べるのも嫌になつた。

あの叔父がいる限り私はずっとこうしているだらう。

（みんなに言つた方がいいんだろうか？私は・・・どうすればいい・・？）

「本当に私を・・・私を探しに来たのか・・・？」

「太子の叔父さんが訪ねてきた？」

「まあ・・・太子さんの話によると・・・ですナビ。」

「殺されるから学校にこないんですか?」

「分からぬけど・・・妹子何か知らないのか?」

「さあ・・・?」

閻魔達は太子の突然の登校拒否について詰し合っていた。

「じゃあ、太子の叔父さん殺しちゃえば?」

「太子さんに聞いてみましょうか、今日。」

「まあ、それもそうだね。」

閻魔が時計を見ると、もう予鈴が鳴る寸前だった。

「あ、ひとつ・・・教室に戻らなきゃ・・・じゃーね年下共ー。」

「名前を呼べー。」

「あ、僕学校に忘れ物を・・・とつてきますから、一人で先に帰つてください。」

「分かつたーー！」

「ほりー前見て歩いてくださいーー！」

「今日は陽が落ちるのがやけに早いですね。」

突然声がしたかと思うと、後ろには曾良が立っていた。

「曾良ー何してたんだよ？」

「いえ、太子さんの叔父が帰ってきたといつ噂を耳にしたものですから・・・」

「え、ああ・・・それで何か探してた？」

「その方の家・・・ですかね。」

「見つかった？」

妹子の問いに曾良は首を左右に振った。

「陽が落ちる前に見つけたかったんですが・・・。」

「それで・・・どうする?もひ帰る?」

「いえ、8時10分に帰ります。それまで聞き込みでもしますかね・・・

・。」

曾良は一人の横を通り抜けて、人混みにきえた。

「それにしても叔父さんつていつたいどんな人なんだらうね？」

「さあ・・・僕も聞いたことないですし・・・」

蝉の鳴き声が小さくなつてくる。

「・・・妹ちゃん、あれ誰？」

「はい？」

指さされたほうに田を向けると、そこには妹子たちの部屋の前で佇む男がいた。

「・・・・・・もしかして、あれが叔父ですかね？」

「まさか。」

すると、その叔父が閻魔達に気付いたのか、こひすに向かつてくる。そして、二人に話しかけた。

「すいません、太子のお友達ですか？」

「え、まあ、はい。」

「いや、変な人ではないですよ。私、太子の叔父の豊口と申します。昔にいなくなつた甥が、生きている、という噂を聞いて。」

（太子を探していふところは本当だ……）

「あの……太子は学校に来てませんでしたし、僕たちは休みの分のプリントを渡しにきただけですので……」

「……ですか？でもお一人とも学年が違つようですが……仲が良いんですねえ。」

「だから、何ですか。太子はたぶん風邪でも引いてるんですよ。今日の所は帰つたら……」

「嘘はいけませんね、嘘は。甥は何人かと一緒に住んでいると聞きました。名前ももう分かってるんですけど……。たしか……妹子さんと闇魔さんと……曾良さん、鬼男さん、ですよね？」

「！？」

「貴方がたがその中の誰であろうと関係ありません。甥はどうにいけるのが聞きたいただけですよ……」

「同居してて、それでも居場所が分からなら仕方ありませんが。」

「家には、いなかつたんですか。」

「チャイムを鳴らしても誰も出できませんでした。……早く場所を教えてください。」

妹子が言い返そうとしたその時、後ろから腕を掴まれた。

驚いて振りほどこうとするが、全く振りほどけない。

「離せよ!!!! ・・・・誰だ!!!!」

慌てて喚き散らすと、相手はそつと妹子の首に何かを当てた。

「年上の方、場所を教えてくださつたらこの子は放します。教えて下さらないのなら・・・わかりますよね?」

「う・・・お過・・・セ・リサウデー・・・」

「どうあるんですか？」

一  
闇魔さん！！僕は大丈夫ですから、絶対に喋らないでください！」

體魔は分かたる言ふるに領く

「まあでも教えて下さらないと、面倒な子供にはありますよ」

- 1 -

閻魔さんですね？・・・少しお休みいたたきます。

豊田は閻魔の腹を思い切り殴ると、氣絶させた。

「え・・・閻魔さつ・・・」

「あせらなくても大丈夫ですよ・・・ちょっと悪ふざけがすぎたよう  
うで。殺すなんてこと、私には到底無理ですか?」

そのまま豊田は高笑いしながら車に乗った。

それと同時に妹子の拘束も解けて、妹子はそのまま座り込んだ。

「今日はすいませんでした。甥に、私が探していくと伝えといへ  
ださい。」

それだけ言つと、豊田は車を走らせ、帰つて行つた。

## 五話 クルイハジメタハグルマ（後書き）

この豊田の強引な「手段」こそが第一の惨劇だと言つていいでしょう。

さほぞたいしたことではないのに、これを悲劇だと勘違いしている太子は眞実に気づくことができるでしょうか？

豊田の手段を閻魔は「冗談だと受け止められるでしょうか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0032i/>

---

狂イ始メタ歯車。

2010年10月9日11時15分発行